令和３年５月２０日（木）　陸奥新報【１６面】

フクロウの営みに関心

青柳小児童　リンゴ園で巣箱観察

弘前

弘前市の青柳小学校（岩渕純校長）の5、6年生13人は17日、地元の下湯口地区のリンゴ園で、食害をもたらす野ネズミ対策として設置されているフクロウの巣箱の観察を行った。今年は巣立ちが早く、ひなの姿を見ることはできなかったが、巣箱に残された生活の痕跡や、食べたものなどを観察し、リンゴの木を守るフクロウへ関心を深めた。（西尾瑛）

下湯口地区では、同地区のリンゴ生産者らで組織する「下湯口ふくろうの会」（石岡千景会長）が、弘前大学と共同でフクロウの巣を約60個設置している。

今年はこのうち三つで営巣が確認されたが、二つの巣ではひながすでに巣立ち、一つの巣では卵がふ化しなかった。

17日は児童のほか、ふくろうの会会員と、弘前大学農学生命科学部の機関研究員ムラノ千恵さんらも参加。観察を行った巣箱には2羽のひながいたが今月8、9日ごろに巣立ったとみられ、児童たちは、はしごを使って空になった巣箱の中をのぞいたほか、消化できなかったものを吐き出した塊「ペリット」を観察。児童たちはペリットを割りばしでほぐし、フクロウが食べたネズミの骨や歯などを次々に発見した。

5年成田栞菜さん(10)は、「巣箱ではフクロウの羽が残っていてフワフワしていてかわいかった。今年は見ることができなくて残念だったけれど、来年こそは見たい」と話した。

ひなの巣立ち後の巣を観察する児童

園地ではこのほか、フクロウと同様に野ネズミを餌とするノスリを双眼鏡で観察するなどし、子どもたちはリンゴ園の生き物たちの営みに触れた。

上記の画像は，当該ページに限って”陸奥新報”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。